

*La bête et le souverain I* 第6回—第9回

郷原佳以

Jacques Derrida, *La bête et le souverain I*, Galilée, 2008.

ジャック・デリダ『獣と主権者 I』西山雄二・佐藤朋子・郷原佳以・亀井大輔訳、白水社、2014年。

以下、参照頁数は上記の順に(224/198)のように示す。

第6回(2002年2月6日)——« bête » の翻訳不可能性(223-251/197-224)

【セミナーの出発点: bête に対する非一知】

・相手を bête とレッテル貼りすることは社会的・政治的な行為であり(224/198)、「計略、すなわち戦争行為、攻撃、傷つけようとする暴力」「侮辱的な、人を傷つける、過度の、つねに侮辱的=不正な[injurieuse]、すなわち法権利の領域では不当[injuste]とされるおそれのある侮辱」(225/199)である。

・しかしひとは、自分が何を意味しているか知らずに、責任を負うことなく、この属詞を「使う」ことができる。相手が bête だと主張するとき、私たちは自分が何を言おうとしているのか知っていることに確信をもてない、闇のなかにいる。(255/199)

・この非一知が本セミナーの出発点:「ひとがフランス語で「bête」と言うときに、ひとは「自分が言っていることや言おうとしていること」ないし「誰かに言わせること」ないし「すること」を「知らない」というこのことを、この非一知ないし不純性、非一厳密性を、意識についてこの知、この学問の本質的な未完成性を、ここに集っている私たちのセミナーの公理とし、第一動者、精神ないしインスピレーションとし、あるいはお好みならば、存在理由にしているからです」(239/212)。

【翻訳不可能性の点=翻訳不可能性はない [le point d'intraduisibilité]】

・bête は sot, stupide, con 等々の隣接語と同じではない。また, stupid, foolish, silly, idiotic, dumm, blöd, blödsinng, albern 等々にも適切に翻訳されはしない。その理由は、これらの語に動物への参照がないからではない。

→「翻訳不可能性の点=翻訳不可能性はない [le point d'intraduisibilité]」とは何か? (231/205)

→ Avital Ronell, *Stupidity* (University of Illinois Press, 2002) への参照

・Ronell, *Stupidity* にデリダが注目するポイント

(1) stupidity は「準一概念 [quasi-concept]」である(デリダにとってはフィクションの論理と関わる)(231/205)

→デリダ: stupidity が「準一概念」であるのは、そこに決定と非決定の間の非決定が関わっているから。主権の問題に絡めて言えば、あらゆる決定は狂気でもあるが(キルケゴール)、bête でもある(決定と非決定の間で宙づりである)。(235/208)

(2) ハイデガーの用いた Dummheit (1933-34年の自身の国家社会主義への参与について)の用法を分析

—古代ギリシアにおいて愚かさは政治性の欠如、共同体で生きられないことを表していた(232/206)

—ハイデガーの Dummheit は政治的なものの中断 [suspension du politique] を表している(232/206)

→デリダ：「ハイデガーは、「私は愚かだ [bête]」、「私とはといえば、愚かだ」、あるいは、「私はいつも愚かだ」と述べたのでもなければ、「私は政治において愚かだ、政治や政治参与に関してはいつも愚かだ」と述べたのでもありません。そうではなく、彼は、「あの日、私はある愚かなこと [une bêtise]、偶発的な踏みはずしを犯した」と述べたのであり、それが言外におわせているのは、「私は後悔している、愚かなことに関してはひとつはつねに完全に責任があるというわけではないけれども」ということであり、割り当てることの困難なこの責任について私たちは語っているのです」(232/206)

(3) 哲学と stupidity との根源的な関係：哲学が stupidity を主題にしてこなかったのは、哲学自体が stupidity と根源的な関係を有しているから。(236/209)

(4) 以上から、翻訳の問題を提起 (237/210)

→「端的な翻訳可能性も端的な翻訳不可能性もない」(238/211) 「愚かさ [bêtise]」の語彙、すなわち、形容詞「愚かな [bête]」、副詞「愚かに [bêtement]」、名詞「愚かさ [bêtise]」の一般的等価物 [équivalent général]、つまり、意味において一義的で絶対的にイデア化可能な概念、ある単語についてなしうるあらゆる実用的、語用論的用法を超越した概念、残余なき翻訳のオペレーターとしての純粋な一般的等価物は存在しない [...] そのようなオペレーターが諸言語のあいだに存在しないことはあまりにも明白ですが、それだけではなく、どこにも存在しないのです。さらには、各言語の内部にも存在しません。」(238/212)

→ bête は否定的評価を行為遂行的に与えるものであるが、そのような評価、価値判断を行うことの客観的でイデア的な一般的等価性が存在しないということになる。(240/213)

#### 【« bête » の「自由な」イデア性の不在】

・ bête の翻訳不可能性の点＝翻訳不可能性はない、とは、言い換えれば、bête にはフッサールの言う「自由な」イデア性が存在しない、ということ。

フッサール：拘束された (gebundene) イデア性 (deux, two, zwei) / 自由なイデア性 (数字 2)

#### 【ドゥルーズ、ラカンの bêtise 論の限界】

・ドゥルーズやラカンは bête を人間の固有性としているが、bête にまつわる語彙の意味そのものに翻訳不可能性の点があり、bête には一般的等価性がなく、「自由な」イデア性が存在しない以上、それを責任ある「自由な」主体としての人間だけのものとするのは厳密には不可能である。bête の意味のイデア性が個別的なものに拘束されている以上、反応 (動物) / 応答 (人間) の区別は無効になる。(242/215)

・ドゥルーズ『差異と反復』一節の批判的分析 (244-/216-)

「愚かさは動物性ではない [La bêtise n'est pas l'animalité]」、「動物というものは、ある意味で、おのれの明瞭な諸形式によって、そうした底から守られている [les animaux sont en quelque sorte prémunis contre ce fond, par leurs formes explicites]。だが、〈私〉と〈自我〉については、事情は同様ではない。というのも、〈私〉と〈自我〉は、それらを苦しめる固体化のもろもろの場によって蝕まれているからであり、ある底の浮上に対して、すなわち、形を歪ませる歪んだ鏡を〈私〉と〈自我〉に差し向け、いま思考されたすべての形式を崩潰させる底の浮上に対して、何ら身を守るすべをもたないからである。」(Différence et répétition, PUF, 1968, p. 196)

↑ 心的経験や現象学的経験を自我論的形式に還元する必要はない。(246/219)

ドゥルーズの命題から響いてくるのは、愚かな者はひとつの「私＝自我」であり、意識的に私と言う

者だ、ということ。→ムッシュー・テストの愚かさ (247/219-220)

ドゥルーズとラカンと共に、責任があり、底の不確定性と自由な関係を保っており、反応するだけでなく自由に応答することができる人間的〈自我〉の主権性にすべてを賭けている。(247/220)

## 第7回 (2002年2月13日) —— ムッシュー・テストと (いう) 操り人形 (253-275/225-249)

【ヴァレリー『ムッシュー・テスト』(Paul Valéry, *Monsieur Teste*, *Œuvres*, II, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1960. 清水徹訳、岩波文庫、2004年) (別資料参照) 分析】

・『ムッシュー・テスト』にこだわる理由：ムッシュー・テストとその分身たる語り手は、自己を「〈自我〉である私 [Moi, Je]」として定立し、純粋な自我論理的意識、コギトの自発的で主権的な=至高の自由を肯定するために、自分は愚かさ (bêtise) を超越しており、愚かさ<sup>に</sup>先んじ、自分のうちの愚かさを殺し、自分のうちの操り人形 (反応するだけの動物機械) も殺したと主張する。(257-258/229-230) それによって、社会的身体および自分自身の身体に対する自由な主権性を主張する。(261/233) (この点で、前回のドゥルーズ、ラカン読解から繋がってくる。) →\*

・操り人形: 非感性的で感性的で、死んでいて生きていて、幽霊的で、不気味なもの (unheimlich) (253/225)。操り人形とは何かを知ることは困難 (255/227)。

・ムッシュー・テストも語り手も男。語り手はヴァレリーの代役であるかもしれないが、ムッシュー・テストに魅惑的な分身を見出し、腹話術師のようにムッシュー・テストを操り人形として語らせる。語り手は、ヴァレリーの登場人物であることと、操り人形であるムッシュー・テストに同一化することにおいて、彼自身も操り人形。→操り人形の代役しか存在せず、誰が誰をコントロールしているのか知ることは困難 (255/227)。ヴァレリーがポーをめぐるテキストで言うように、「**始めに神話=寓話ありき** [AU COMMENCEMENT ÉTAIT LA FABLE]」(256/228)

・→\*操り人形に何らかの生、すなわち、存在のうちに固執する頑固で粘り強い運動を想定せずに、いかにして操り人形を殺すことができようか? この頑固さ、コナトゥスが愚かさ [bêtise] の特徴。「愚かさは頑固です [La bêtise est têtue]。[...] 愚かさは [...] つねに頑固な仕方で、頭に関わる=生死のかかった [capitale] 仕方で、頭から来て、斬一首的 [dé-capitale]、さらには無頭的な [acéphale] 仕方で固執し [s'entête]、頭をのぼせ上がらせ [monter à la tête]、頭から来て、頭で逆らい [tenir tête]、頭をたたくものであるでしょう」(259/231)。愚かさ [bêtise] は人間の固有性でも生きもの一般の固有性でもなく、頭をもつ=頭に関わるあらゆる生きものの固有性。(258-260/230-232)

・男としての、「自我である私 [moi, je]」としてのムッシュー・テストと語り手→冒頭の一節、とりわけ、« j'ai touché à des femmes » (「私は女たちのほうに手を出した」) の分析 (→別資料参照) :

列挙される過去の行為には愛と欲望、すなわちパッションはない。

女たちに触れるのではなく、一種のビジネスとして、女たちのほうにかるじて手を出すだけ。(265-266/237-238)

→「ここに感じられるのは愛ではなくてしかめつら [On ne sent pas l'amour ici mais la moue]」(266/237)。

「彼は愛を営むのではなく、しかめつらをする [il ne fait pas l'amour, il fait la moue]」(266/238)。

moue : 関心の乏しさを表すためのコード化された渋面 (265-267/236-238)

・続く一節の分析 (別資料参照) :

語り手の「算術」は「誰」を「何」に、人をものに変異させる。語り手が見出しているのは多重化した

分身たち、「自我」たちの社会。ここには政治性があるが、それは自己のうちの他者、他なる自我〔moi〕との「内的政治」（「ムッシュー・テスト航海日誌抄」）。（267-271/239-242）

・ムッシュー・テストとその分身たち（ヴァレリー、語り手、等々）はみな男、言葉に権利をもっている男たち。対して、マダム・エミリー・テストが発言するときには、書くため。→「マダム・エミリー・テストの手紙」から4つのモチーフを挙げ、引用。（271-275/243-249）

#### 第8回（2002年2月20日）—— 操り人形あるいは勃起男根としてのファルス（277-313/251-286）

【問い：ファルスは人間に固有なものなのか？ ファルスが *bêtise* そのものだとしたら？（277/251）】

【ラ・フォンテーヌ『寓話』「狼と子羊」（「最強者の理屈はつねに最良である〔*La raison du plus fort est toujours la meilleure*〕」）（別資料参照）分析】

— 狼＝自らの正当化のためにつねにさまざまな理屈〔*raisons*〕を持ち出し、自らにさまざまな理屈を与えながら必ずしも理がある＝正しい〔*avoir raison*〕わけではないが、より弱小な国家に対しては打ち勝つ〔*avoir raisons de*〕強力な国家（280/254）

— 狼の復讐は推定上の容疑者と何らかの仕方で姻戚関係を結んでいると想定されるすべての者に対して向けられる→子羊の生まれながらの原罪（281/255）

— 「正当防衛」の名において、いかなる裁判も経ずに、ただ主権者自身の利益のために力が行使される（283/257）

— 王太子への献辞分析→狼は偉大で（*grandeur*）高貴な（*hauteur*）王陛下（*majesté, majestas*）<sup>ル</sup> イ 14 世）を象徴している（283-284/257-258）

— 狼＝王陛下の「偉大さ、高貴さ、屹立状態、威厳〔*Grandeur et hauteur, érection, majesté*〕」（285/259）の強調

【ラ・フォンテーヌ『寓話』「ライオンと社会をなす牝牛と牝山羊と牝羊」（別資料参照）分析】

— ライオンは〈殿さま〔*Sire*〕〉の資格において、主権的な分配の法（ノモス）の名において、すべてを独占する権利を自分に与える（285-286/259-260）

— 理性ならぬ理性＝理由＝理屈〔*raison*〕、すなわち、最強者の権利への訴え（285-286/260）（cf. ジャイアン「のび太のくせに生意気だぞ！」「お前のは俺のもの、俺のものは俺のもの」）

— 行為遂行的に自らに権利を与え、その権利を行使する（285-286/259-260）

— 主権者は自分自身を自ら名づけ、自己の自権性〔*ipséité*〕を典拠とする（287/262）

【*majesté (majestas)* とは何か？】

— 偉大さ、高貴さ、尊厳、主権者の主権性、「偉大さよりも偉大な偉大さの男性的勃起＝屹立状態〔*l'érection mâle d'une grandeur plus grande que la grandeur*〕」（287/262）「いかなる他の優越性にも優越する高貴さ＝高さ」（288/262）主権的権力の「萎縮することのない絶対的屹立状態、唯一の、硬直した、堅固な、孤独な、絶対的な、特異なファルス性」（288/263）

— 絶対的な高みからすべてを見下ろすことができる国家、政治的指導者の視線の権利

— 彼ら指導者は現代政治の演劇的空間（テレビのパペット・ショー＝ベベット・ショー（*Bébête show*））において操り人形になることを望んでいる

### 【操り人形なるもの=存在なき生きもの】

- ・おそらく二つの操り人形、操り人形の二つの寓話があるのだろう。(290-291/265-266)
- ・寓話 (fable)、寓話的なもの (fabuleux) を強調するのは、政治的な力や権力の本質が、寓話的なもの、すなわち、虚構的で行為遂行的な話し言葉を經由するものであり、権力とはそれ自体が寓話、虚構、虚構的な話し言葉、見せかけの効果だから。(Cf. 『寓話』の狼やライオンの話し言葉) (290-291/265)
- ・二つの操り人形のあいだの差異：「息のめぐらし (Atemwende)」(291/265-266)、いかなる生き生きとした現在においても保証されない (292/266)、操り人形なるもの=存在なき生きもの、存在者の見せかけ、補綴、フェティッシュ (292-293/267)

### 【ファルスとしての操り人形／操り人形としてのファルス】

- ・操り人形<sup>マリオネット</sup>：処女マリア (mariole, mariolette) の女性的形象 (294/268)  
：ファルスの屹立状態にあるファルスのな形象 (295/269)

- ・生きものの曖昧さのゆえ：

生きものは自発性 (spontanéité) によって定義されるが、自発性とは、自己運動的な自律性 (autonomie automatrice)、主権性であると同時に、それとは反対の、自動人形的な自動性 (automaticité) でもある (295/269)

→ (操り人形がファルスのだというよりは、) ファルスはもともと操り人形<sup>マリオネット</sup>だった！ (296/270) :  
古代ギリシャ・ローマにおけるファロス：儀式で誇示される勃起男根を象った巨大人形

—永続的に勃起した虚構的で補綴的な男根表象

—欲望から独立した自動機械

—獣=愚か (bête) であり、生命をもたず (inanimé)、人間=男から切り離されている

→冒頭の問い：ファルスが自動的であって自律的ではなく、機械的、補綴的なものならば、それは本当に人間に固有なものだろうか？ それともそれは非人間的な「何」なのか。(296-297/270-271)

### 【勃起男根的愚かさ】

愚かさ、喜劇的な次元——プリアポス：永続的な抑えがたい勃起男根像の状態にある並外れたファルスの陰茎を与えられた、ディオニュソスとアフロディテの息子

勃起男根像 (ithyphallique)：ディオニュソス祭やバッカス祭で演出された勃起したファルス、巨大で偉大で高貴で硬く硬直したファルス

勃起男根的愚かさ (bêtise ithyphallique)：そのものとしてのファルスの特徴づける本質的な愚かさ

勃起男根 (ithyphallus)：反射的なぜんまいと制御不可能な自動性がけっしてゆるむことのない操り人形

愚かさ (bêtise)：勃起が止まらなくなってしまうこと

持続勃起症<sup>プリアポシズム</sup>：無限の勃起男根状態 (l'ithyphallisme infini) という致命的な疾患 (299-300/272-273)

### 【ツェラン「子午線」読解】

- ・芸術、操り人形、メデューサの頭=首、自動人形、頭一般、〈疎遠なもの〉、〈不気味なもの〉の布置を通して、比類のない詩的署名を解説すべく試みよう。(302/275)

- ・「出会いの秘密 (Geheimnis der Begegnung)」: 詩の秘密、詩の現前性ないし現前化の秘密 (302-303/276)
- ・「子午線」全体が Gegenwart (現在、現前性) の周りをまわっている→三つの例を提示 (304-/277-)

(1) ビュヒナー『ダントンの死』で、「芸術には盲目的な」リュシールが叫ぶ「国王万歳！」という言葉  
を「抗う言葉 (Gegenwort)」と呼び、そこに「詩」そのもの (die Dichtung) を聴き取り、それはGegenwart  
(現在) の威厳 (majesté) のために発言されたと主張する:

「ここで忠誠を誓われているのは、人間的なものの現前性を証言する現在の威厳、不条理なものの威厳  
に対して、です (Gehuldigt wird hier der für die Gegenwart des Menschlichen zeugenden Majestät des Absurdenz)  
[L'hommage ici rendu l'est à une majesté du présent, témoignant de la présence de l'humain, la majesté de  
l'absurde]」:

**威厳、主権性=至高性に関するせり上げ**: 古い単語を維持しつつ、その意味を変異させようとする「誇  
張的なせり上げ [surenchère hyperbolique]」(305-308/278-281)

(2) 「詩は [...] そのひたすらに内面的な本質からいって、現在であり現前であるのです (Gegenwart und  
Präsenz) [présent et présence]」(308/281)

(3) 詩のこの〈今-現在〉、私の〈今-現在〉は、他者の〈今-現在〉、他者の時間を語るがままにし  
なければならない、他者に、自分の時間を残しておき、もしくは与えなければならない、とする。

詩とは二人で話すこと (Gespräch) であり、その言葉の今がその言葉のうち一人以上を取り集める  
話し方であり、他者の時間のもっとも固有なものを自らと共に署名する (mit-sprechen) ものだ、とす  
る。(309-312/281-285)

#### 第9回 (2002年2月27日、討論の回、即興) —— 私より前に来ていた蛇への歓待 (315-335/-287-307)

・蛇には頭部があるか、顔があるか、という問い→「動物には顔があるか?」という問いに対するレヴ  
ィナスの答え「蛇には顔があると言えますか」を想起 (315-317/287-288)

・D・H・ロレンスの詩「蛇 [Snake]」読解: 水鉢に水を飲みに行った私よりも先に蛇が来ていた  
ーレヴィナスの「お先にどうぞ [Après vous]」を想起: 他者は私以前に現存していて、私は自分に先行  
する他者の命令を受ける (317-319/288-290)

ー蛇を殺さなければ自分が殺される時、蛇を殺すべき (教育の声など複数の声:「人間なら、男なら…」)  
か? 殺さないでおくべき (客人に対する歓待) か? (320-322/292-294)

ー呪われた「教育の声」に指図され、恐怖に駆られて客人を攻撃する (323-324/296-297)

ー蛇が王のように見える→蛇=獣がテロ行為の標的になった後、主権者となる (325/298-299)

・「汝殺すなかれ」の倫理の問題→(1) 倫理は人間だけでなく動物に対しても課されるのか? (2)  
最初に来た者が主権者だとすれば、主権性の脱構築は、私の主権性を他者に委譲することなのか、それ  
とも、主権一般の理念に対して異議を唱えることなのか? 道徳的な法は殺害以前に潜在的にあり、殺  
害後に顕在化する (326-328/299-300)

・蛇は亡命中で王位を奪われた王「のよう」(328-329/301-302)

ムッシュ・テストと劇場で

デカルトの生活はこのうそなく単純である……

馬鹿なことは得意ではない。たぐさんのひとに会い、外国もいくつか訪れた。いろいろな事業に一般買つてみたが、どれも好きになれなかつた。まあ毎日、飯を喰い、何人か女と関係をもつた。ふり返つてみれば、何百かの顔、二つか三つのなかなかの光景が眼に浮かぶし、二十冊ほどの本の中身も思い出す。わたしとしては、一番いいものだけを記憶にとどめたのではないし、一番いいものだけをそつたわけでもない。残ることのできたものが残つたのだ。

こういう算術をしているから、年を取つてゆくのに驚かすにすむ。それにまた、わが精神の勝利の瞬間を教えあげ、それを集めて、はんだ付けをしたところを想像して、幸福なる生涯をかたちづつてみる……そんなことだつて、やつてみてできぬことはあるまい。それにしても、自分の判断はいつも誤つてははなかつたと思う。わたしは自分を失うことはめつたになつた。自分を嫌悪したこともあり、自分を熱愛したこともあ

る。——やがて、われら両者ともに老いた。

何度もわたしは、自分にとつてすべては終つたのだと想定しては、あらんかぎりの力をふりしぼつて自分に終止符を打とうとした。ある苦しい状況を究めつくし、照らしたしたいという思いに駆られていたのである。おかげでわかつたのだが、われわれは自分の考えるところを、何とあまりにも他人の考えの表現形態に従つて、判断しているとか！ そうわかるまでは無数の言葉がわたしの耳もとでぶんぶん唸つていたが、以後、それらの言葉に託された意味がわたしを語りうごかすことはめつたになつた。そしてわたし自身が他人に向かつて言葉を口にするたびにわたしの感じたのは、その言葉がどれもこれも、わたし自身の思考とはちがうということだつた。——口に出したとたんに言葉は萎え、うが、なくなるからである。

もし、ものごとの決め方が世の多くのひとと同じようだつたら、わたしは自分を並み以上と思つたであらう、そればかりではない、世間の眼にもそう見えたことであらう。しかしわたしは他人より自分自身のほうを選んだのだ。世間がすぐれた人物だと呼ぶのは、みづからを欺いたひとである。すぐれた人物だと驚くためには、そのひとを見なければならぬ、——見られるためには当人みづから姿を現さねばならぬ。そこで、そのひと

存在するのを楽しんでいただけの閑なころのことだつた。

やがて、そんなことも考えなくなりはじめたころ、わたしはムッシュ・テストと知り合つた。(いまわたしは、ひとりの男が毎日小さな空間を動きまわつて残してゆく軌跡のことを考えている。)ムッシュ・テストと親しくなるまえから、わたしは彼の独特な拳動に惹かれた。彼の眼や服装、彼の姿をよく見かけるカフェでギヤルソンにほそぼそと話しかけるちよつとした言葉に注意をこらしたのだ。はたして彼は観察されていると感づいているだろうか。わたしは眼を向こうの眼からすばやく逸らせては、追つてくるその眼をつかまへようとした。彼が読みすてたばかりの新聞をとりあげたり、ふとした折りの控えめな仕事を心のなかで反観したりした。彼に注意をはらうひとなどひとりもないことに、わたしは気がついていた。

この種のことで知らないことがもうなくなつたころ、わたしたちは付き合いはじめた。彼とは夜しか会つたことがない。あやしげなところで一度、劇場では何度も。ひとから聞いたところでは、週日は株式取引場でたいした額でもない売り買いをして暮らしているとのことだつた。食事はクワイエンス街の小さなレストランですませている。その店で食事をする様子は、まるで下痢でも飲むように手早かつた。ときにはほかの店へ出

かけて、ご馳走を獲発し、ゆつくりと賞味することもあつた。

ムッシュ・テストはたぶん四十歳くらいだつた。異常な早口で、しかも声が低くもつて聞きとりにくい。彼にあつては自立つところはまったくなく、眼の表情も、手の動かし方もさうだつた。とはいへば軍人のようにがっちりしていたし、歩調の規則正しきには驚かされた。話をするとき、腕を挙げることも指を立てたりすることもない。操り人形は殺していたのだつた。微笑むこともないし、今日はも今晚はも言わない。「お元気ですか」と言われても耳に入らないようだつた。

彼の記憶力はわたしに多くを考へさせた。いろいろな特徴を手がかりに判断できたのだが、彼の記憶力はいわば比類ない知的体質のおかげなのだ、わたしは想像した。彼にあつて記憶力は生まれながらに極度にすぐれた能力ではない、——鍛錬され、もしくは改造された能力なのだ。以下は彼の言葉である。「二十年来、もう本をもつていない。自分の書いたものも焼いた。わたしは生まれ身の自分を推戴するのです……残したいと思ふものだけを記憶に残すのです。でも、一番むずかしいのはそういうことではない。明日になつたら欲しがらぬものを、いま記憶に残しておくことです……わたしは機械的に選別する篩を探して来た……」

は、自分の名前について愚かな妄想にとり憑かれているありさまを、わたしに見せてくださることになる。かくして、いかなる偉人にも間違えという汚点がついている。弾力だと世に思われている精神は、どれも、まずはじめに、自分を世に知らせるという過ちを犯しているのだ。公衆からもらうチップと引き替えに、彼は自分をひとめにつかせるのに必要なだけの時間をわざわざ割き、自分の伝達と、なくてもいい満足感の準備のためにエネルギーをついやす。ついに、栄光に照らされたぶざまな演技を、自分こそ他に類のない者と感ずる悦びになぞらえるに到る、——まったく自分だけの大いなる悦楽と思ひこんでしまうのだ。

そこでわたしは夢想した、もつとも強靱な頭脳、もつとも明敏な発明家、もつとも正確に思想を認識するひとは、かならずや、無名のひと、おのれを出し惜しむひと、告白することなく死んでゆくひとにはかかない、と。そうした人ひとの生き方がわたしに開示されたのは、他でもない、彼らほど志操堅固ではないため名声赫々たる生き方をしているひとによつてなのである。

この帰結はしつに容易だつた。結論の形成されてゆく過程が、毎秒毎秒、眼にはつきりと思へたほどだ。ふつうの偉人をまず想ひうかべ、出発点で彼らが間違えという汚れに染まつていない、というか最初の間違えそのものに寄りかかつていない姿を想像してみるだけで、彼らより一段と高い意識、彼らほど粗雑ではない精神の自由の感覚が何であるかを理解することができた。こうした単純な操作を試みただけで、まるで海底に降りたつたような奇妙なひろがり、わたしに開けてくるのだつた。公けにされた幾多の発見のあまりの輝かしさに消されて眼につかないのだが、また他方で商売や危惧や倦怠や貧困が日々を産みだしてゆく自立たぬ発明のかたわらに、わたしは、内心の傑作がいくつも認められると思つた。わたしは、世人の知る歴史を匿名の年代記の下に消滅させて、楽しんでいたのである。

それは、透明な生活を営んでまつたくひとめにつかず、孤独に生きて、世のだれよりも先がけて理を知っているひとたちだ。無名に生きながら、彼らはいかなる著名な人物をも二倍に、三倍に、数倍にも偉大にした人物だとわたしに思へた、——幸運をつかもうと、独自の成果を挙げよう、それを世に示すことなど軽蔑している彼ら。思うに、自分は、そこらへんにあるものとはちがう、などと考えるのは巨んだことであらう……

こうした考えがわたしの頭に浮かんで来たのは、九三年十月、思考がただ思考として

そういう彼の言葉をいろいろと考えたあげく、ムッシュ・テストはわれわれの知らぬ精神の法則を発見するに到つたのだと思うようになった。かならずや彼は、この探究に何年もの歳月を捧げたにちがいない。いやそれ以上に確かなのは、さらに何年かを、以前にもまして多くの歳月をついやして、自分の発明を成熟せしめ、みづからの本能たらしめたにちがいないということだ。発見など何ものでもない。おすかしいのは発見したものをおのれの血肉と化することである。

持続のつくりだす微妙な作用、つまり時間というもの、その配分と管理体制、——よりすぐれた事象だけに時間をついやして、それらを特別に育ててゆく、——ムッシュ・テストの重大な探究のひとつがこれだつた。彼はある若干の観念が反復して現れることに注目して、そういう観念に反復の数をたつぷりと注いだ。これが役に立つて、彼は自分の意識的研究の成果を最終的には機械的に適用できるまでになつた。それどころか、彼はこの作業を簡潔な方式にまとめようと思つてた。彼は口にしてた、「成熟セルゴト……」

たしかに彼の特異な記憶力は、われわれの日々の印象のうちの、想像力だけではどうにも構築できぬ部分、ほとんどそういう印象だけをみづからのうちに残しておいたにち

「思考」という名の峠のうへにつねに立ちただかつて、事象のあるいは視野の果てへと両の眼を大きく見ひらいている男……

「真理」を自分自身から受けとることは不可能だ。それが形成されつつあると感ずるときつまり印象だけにと、ひとは同時に、身慣れぬ、もうひとりの自分をつくりだし……それを誇り、——それをひたすらみづからのものとし……(それこそは、内的政治

の頂点だ。) 明快な「自己」と混濁した「自己」のあいだ、正しい「自己」と罪ある「自己」のあいだには、昔からの憎悪と昔からの和解、昔からの断念と昔からの懇願がある。

わたしは馬鹿者ではない、なぜならば、自分のことを馬鹿者だと思つたに、わたしは自分を否定しているからだ——自分を殺しているからだ。

知原資料

知原資料

★

意識的——テスト、証人。

あるシステム——「自己」がそのシステムの瞬間的部分に他ならないのに、その部分自体としてはみずから「全体」と信じている——、そんなシステムを、繰り返して、再提示することにみずからの役割を限定している《永遠の》観察者を想定してみよう。

「自己」は、もし——全体であると信じていなければ、けつしてものごとに着手できないだろう。

彼の触れるカワシキ乳房が、突然、そのありのままに限定されたものとなる。

大傷そのものまで……

あらゆるものの《馬鹿らしさ》が感しられる。馬鹿らしさ、言い換えれば、一般性に対置された個別性。《何かより小さい》ということが精神のおそるべき記号となる。秩序だった可能的なるものの「アーマン」。

フ・フォンテーヌの詩 今野一雄訳  
石波文庫

王太子殿下へ

殿下、

文字の領域にだに巧妙なものがあるとするなら、それはイソップが道徳を語った形式であるということが出来ます。わたしではなく、だれかほかの人がそれを詩で飾りしことをしてくれれば、それをまことに望ましいことでしょう。古代人のなかでいちばん賢明であった人も、そういうことは無用ではないと考えました。殿下、わたしはその試みのいくつかをあえてあなたに捧げることにします。それはあなたの幼い年ごろにふさわしいお話です。あなたは、高貴な方々にも遊びと戯れが許される年ごろにあるのですが、同時に、ときにはまじめなことに心をむけなければなりません。そういうことはいづれもわたしたちがイソップからうけついでいる電話のなかにみいだされます。それは見かけは、たしかに、たいてい、あまいことですが、しかしそのあまいことが大切な真実をつづんでいるのです。

殿下、このように有益な、同時にこのように楽しいつくりことを、あなたが喜んでこらへること、わたしは疑いません。有益なことを楽しいこと、このふたつより望ましいこと、があるでしょうか。このふたつを人間に学問をもたらすことになったのです。イソップはこのふたつをまじり合わせるすばらしい技術を見ました。その書物を読むことは知らず知

細原資料

10 オオカミと小ヒツジ

強者の理屈はいつでもまかり通る。

すぐにそれを証明しよう。

澄んだ水の流れて

小ヒツジがどの向きをいやしていた。

腹がへって、なにかいいことはないかと探していたオオカミが、

帆を漕ぎながらその場所へやってきた。

「なんでまきまはおれの飲みものを濁らせるような大胆なことをする。」

そのけものは怒りに燃えて言った。

「でまきまおれをこらしめてやる。」

「陛下」と小ヒツジは答えた。「なにぞそ

お怒りなさいませんように。」

そんなことをおっしゃらないで、わたくしが

陛下より二十歩以上

川しもで

水を飲んでることを、

したかつて、陛下のお飲みものを

濁らせることは決してできないということをお考えくださいませ。

「まきまは濁らしている。」疑心なけものは言い張った。

「それだ、まきまが去年おれの悪口を言ったのも知ってるぞ。」

「どうしてそんなことができましょう、まだ生まれてもいなかったのに。」

と小ヒツジは言った。「わたくしはまだ母さんの乳を吸ってるんです。」

「おまえてなけりき、おまえの足音だ。」

「足は知りませんが。」「こまおまえの身内のだれかだ。」

おまえたちは乳を盗み盗み、

おまえたちも、羊飼も、イヌも。

おれはそう聞いている。おれはかたきやうなけりきならん。」

さういふと、オオカミは、森の奥へ

小ヒツジをさらって行って、それから、食べてしまった。

正規の裁判をしないで。

細原資料

らずのうちに人の心のなかに美徳の種子をまくことになり、勉強をしているとは気がつかず、まだ、別のことをしていっていると眠っているうちに、自分を知らぬことを教えてくれます。

これは、あなたの教育のために国王陛下が選ばれた人がもたらして、みごとに成功している巧みな方法です。その人は、あなたがなんの苦勞もせずに、もっと適切に言えば、楽しみながら、王者として知らなければならぬすべてのことを学ばれるようにしています。そういう方法にわたしたちは多くのことを期待しています。とはいえ、正直に申しまして、わたしたちがそれよりもはるかに多くの期待をかけていることがあります。それは、陛下、わたしたちの無敵の君主が誕生とともにあなたにあたえているすぐれた資質です。毎日のようにあなたに示しているお手本です。陛下はどのように偉大な計画を立てている。全ヨーロッパの疆土を、陛下の企てを思いつくまらざるために全ヨーロッパが動かしているからくりとが、平然と眺めている。準備すればたちまちに、一季ごとに宮殿しかたの麗麗な美しい地方の中心にまで侵入し、戦いにはこのうきな不利な季節に、ほかの君主たちの宮廷では休息と歡樂が支配しているときに、別の地方を一週間で攻陥している。陛下は人間を征服するだけではなく、自然にたいしても勝利を取らようとしている。そして、アレクサンドロスのような征服をなしたげたその遠征から帰ってくると、アウグストゥスのように國民を治めている。こういうことをこらへておられるあなたは、陛下、真実をおっしゃってください、まだ幼い年ごろにあるとしても、陛下と同じように、輝かしい栄光におかれることでしょう。栄光の女神への愛において、陛下の競争者として名譽をおけることができる時期が、

あなたは待たずして思いで待っている。いや、陛下、あなたはそれを持ってはいない、それに先だつて行動している。その証拠には、あなたがたえす示される高貴な心の動き、鋭利たる態度、熱情、才気と勇氣と偉大な魂のしるしを見れば十分でしょう。たしかにそれはわたしたちの君主の心にあはれるべきな喜びでしょう。しかし、そのようにして、いつの日かその大艦に多くの民衆と國民をたたらおせることになる若木が成長していく光景を見るのは、万人にとってまことに快いことです。この点についてわたしは、もともと多くのことを申し上げるべきでしょうが、あなたを苦しませるしるしのほうに、あなたが敵えるしるしよりも、わたしの力に、さうさわしいので、わたしはさう多くを話さずこらへにいれることとして、これまでに申し上げた真実を、ただいまの真実を言い添えることとします。それは、陛下、わたしは、うやうやしい敬意を、

あなたのこころに、従順で感嘆なしもぐで、

ト・ラ・フォンテーヌ

- (1) ルイ十四世と王妃マリ・テレーズとの婚約(一六六二—一七一七)。当時、一六六五年。
- (2) ソクラテスのこと。
- (3) 王太子の最初の養育師マリー。
- (4) ルイ十四世のオテル・ルロアン特使(一六六二—一六六八)、フランドル占領(一六六七)、フランス・プロシヤ占領(一六八八)などあります。

6 ライオンと共同で事業をした牝ウシと牝ヤギと牝ヒツジ

牝ウシと牝ヤギと、味の牝ヒツジが  
近在の殿さま、荒々しいライオンと、むかし、  
共同で事業をはじめ、  
儲けも損も分け合うことになった。  
牝ヤギの駈にシカがかかった。  
すぐに牝ヤギは仲間知らせてやった。  
みんなやってくる、ライオンは爪で教をかぞえ、  
「われわれは四匹で獲物を分ける」と言い、  
四つにシカを切り裂き、  
まず自分が、殿さまの資格で、一つを取って、こう言った。  
「これはわしのものだ。その理由は、  
わしがライオンという者だからだ。  
それにはだれも文句はあるまい。  
二つ目も、権利によって、わしのものである。  
その権利とは、おまえらも知っている、強者の権利だ。」

いちは勇氣のある者として、わしは三つ目を要求する。  
おまえらのだれかが四つ目に手を出したら、  
わしはすぐにそれをつまみ殺してやる。」